

の「レッドライン」の設定であり、ウクライナを非武装緩衝地帯とするという意味合いを持つ。「非ナチ化」については後述する。

第一に糾弾されるべきはロシアの侵略行為であり、いかなる理由があろうともウクライナへの帝国主義的侵略戦争を正当化することはできない。プーチンは「軍事施設を狙っており、民間施設を攻撃していない」「ネオナチの武装勢力が市民や公共施設を盾にしている」としているが、米帝のイラクやアフガン侵略戦争を持ち出すまでもなく、破壊的な現代兵器を駆使した軍事作戦の常として被害が軍事施設に限られることなどありえない。ロシア軍は直ちに軍事行動を停止し、ウクライナから撤退しなければならぬ。

しかし、ロシアの侵略に反対することとは、ウクライナ国家とゼレンスキー政権、その背後にいる米帝・NATOによるロシアに対する軍事的威嚇と挑発行為を支持することを意味しない。この戦争の基本性格はウクライナを舞台とした欧米とロシアによる帝国主義間戦争であり、米帝・NATOの東方拡大によるロシアの軍事的封じ込め政策、多額の軍事支援とテコ入れにより二〇二五年の「ミンスク合意」を無視してウクライナ東部のロシア系住民居住区域への軍事的圧迫と攻勢を強めたゼレンスキー政権の強硬

策がロシアを挑発し、今日の事態を招いた直接的な原因だからだ。またゼレンスキー政権は、独占資本の意を受けた新自由主義政策で労働者の権利を剥奪し労組弾圧を強める一方で、ネオナチの白人至上主義極右武装集団「アゾフ大隊」を抱え、ロシア語の公用語からの排除（二〇一九年制定の「ウクライナ語の国家語としての機能保障法」が三月一六日に施行）、ロシア系住民への圧迫、民族排外主義政策を推し進めてきた。

我々はロシア国内で、プーチンの権威主義独裁権力からの弾圧覚悟で反戦の声を上げているロシアの人々に連帯する。同時に、ゼレンスキー政権の民族排外主義、ブルジョア権威主義独裁に頑強に抵抗しつつ、ロシアの帝国主義的侵略に立ち向かうウクライナの人々に連帯する。ブルジョア国家と労働者人民を峻別することは我々の原則であり、自国も含めたあらゆる「戦争国家」に抗う労働者人民の国際連帯こそが求められている。

「非ナチ化」はプーチンの本意か？
「非ナチ化」はプーチンの本意か？
「非ナチ化」はプーチンの本意か？
「非ナチ化」はプーチンの本意か？

ここでウクライナの戦争に至るプロセスを検証する前に、プーチンの「非ナチ化」の意味するものについて触れておきたい。

二〇一四年の「マイダン革命」(後述)で米帝・NATOはウクライナのネオナチや反ロシアの極右民族主義者集団に武器を与えて扇動し流血の事態を引き起こしたことが指摘されている。実際に「マイダン革命」後の親欧米派政権にネオナチの極右民族主義政党の大物が何人も入閣している。この時に東部の中核都市マリウポリを拠点とするネオナチの武装集団「アゾフ大隊」もウクライナの国家警備隊に編入されNATOの軍事アドバイザーの訓練も受けている。プーチンの「非ナチ化」は、このネオナチの極右武装集団・民族排外主義者の排除を意味する。現在の報道では「非ナチ化」は侵略の口実、プーチンの妄想であるかのように扱われているが、欧米の報道機関も少し前まではこのネオナチの武装集団について報道していた。ウクライナのネオナチの存在は、欧米帝国主義陣営にとっては「不都合な真実」だが、隠しようもない。三月八日の国際女性デーのNATO公式ツイッターの画像上のナチスのシンボル「黒い太陽」の紋章を着用したウクライナの女性民兵の姿が波紋を呼んだ。既に削除され取材を受けたNATO高官は徽章をうつかり見落としたと話した(三月十日「ニューズウィーク」)。最近になってロシア軍が包囲する東部の要衝マリウポリが「アゾフ大隊」の拠点であることが報道され始め

ている(三月二日共同など)。なおこの「アゾフ大隊」については、日本の公安調査庁「国際テロリズム要覧二〇二二」にも「ネオナチ組織の部隊」と記述されている。

NATO東方拡大―ロシア封じ込め政策が招いた侵略戦争

NATO東方拡大の歴史を振り返ると、一九九九年、ポーランド、ハンガリー、チェコ。二〇〇四年、ルーマニア、スロベニア、バルト三国、ブルガリア、スロバキアが加盟した。旧ソ連で未加盟なのは、ウクライナとジョージア、モルドバだけになった。二〇〇八年にブカレストで行われたNATO首脳会議で、ジョージアとウクライナの「将来的なNATO加盟」が確認されたことが、プーチンに「レッドライン」を覚醒させたと言われる。

二〇一四年にNATO加盟に否定的な親ロシア派のヤヌコーヴィチ大統領を暴力的に追放して親西欧派政権を誕生させた「マイダン革命」の後で、オバマ政権下のバイデン副大統領とヌーランド国務次官補が政権転覆に暗躍していた。キエフのマイダン(広場)の集会で群衆を扇動するヌーランドや米共和党国会議員の姿が映像記録でも残っている。

この政権転覆に親ロシア派勢力が反発した。ロシアの軍事介入もあり

クリミア自治共和国が独立を宣言し、ドネツクとルガンスクがその後を追いつき、ウクライナ内戦が本格化した。二〇一四年以降、米政府からは二〇億が相当の軍事援助がウクライナに注ぎ込まれたと言われる。しかしこれはNATO加盟主要国からのウクライナへの軍事投資の一部に過ぎない。ウクライナの軍事支出は、二〇一四年のGDP比三%から二〇二二年には六%に増大し、百十億ドル以上となっている。米国の民間軍事会社「アカデミー」(旧名ブラックウォーター)も参入しているという情報もある。

ウクライナ東部での紛争激化を受けて、ロシア・ウクライナ・ドイツ・フランスの四カ国は、二〇一四〜一五年に和平プロセスを定めた「ミンスク合意」(二〇一四年ミンスク1、二〇一五年ミンスク2)を締結した。二〇一五年の「ミンスク2」の主な内容は、武器の即時使用停止・外国部隊の撤退・OSCE(欧州安全保障協力機構)による武器使用停止の監視・ドンバス地方の「特別な地位」に関するウクライナの法律採択・OSCEの基準に基づく前倒し地方選挙の実施などだ。しかし「ミンスク合意」は履行されず、ウクライナのポロシェンコ政権は徴兵制の復活を含めて軍備増強を進め、二〇一九年二月には憲法を改正、将来的なEU・NATO加盟を目指す方針を憲法に明記するに至る。

この政権転覆に親ロシア派勢力が反発した。ロシアの軍事介入もあり

二〇一九年五月に大統領に就任したゼレンスキーは、親EU路線をとりつつもロシアとも対話の用意があると表明。二〇二〇年七月、ようやくウクライナとロシアを後ろ盾とする東部の武装勢力との間で停戦合意が実現した。

しかし二〇二一年に入ってから停戦合意違反が頻発する。二〇二一年のバイデン政権誕生で、二〇一四年にウクライナ内戦に火をつけたコンジが再始動したことがその背景にある。ヌーランド次官補は国務副長官に就任、彼女と協力していたサリバ副大統領補佐官は大統領補佐官(国家安全保障問題担当)となり、バイデン政権は発足直後、ウクライナ政府に六億五千万ドルを支援することになった。

同年夏、アフガニスタンからの米軍撤退を巡る「失態」で米世論の支持を失ったバイデン政権は、ウクライナで名誉挽回を謀る。九月二〇日NATOを中心とした十五カ国六千人の多国籍軍によるウクライナとの軍事演習を展開。この演習は一九九六年から始まっているが、開始以来、最大規模の演習だったと報道されている。一〇月三日になると、バイデンはウクライナに百八十基の対戦車ミサイルシステム(シヤベリン)を配備した。このミサイルはオバマ政権のときに副大統領だったバイデンがウクライナ

に提供しようとして提案し、オバマが「挑発的すぎる」と却下したと言われる。ここまで踏み込めば、ウクライナは事実上のNATO加盟国扱いであり、すでにルーマニア、ポーランドに巡航ミサイル発射可能な「イージス・アショア」が配備された(ポーランドは二〇二二年運用開始予定)ことに危機感を募らせていたプーチンは「レツドラインを超えた」と受け止めた。ロシアは一〇月から一月にかけてウクライナ国境に「軍事演習」と称して十万人の軍を展開し、緊張が極度に高まった。二月二〇日、ロシア外務省はウクライナとジョージアの将来的なNATO加盟を認め、二〇〇八年NATO首脳会議の決定取り消しを求め、NATOがこれ以上拡大しない確約や国境付近での軍事演習の停止を要求した。しかしNATOはこれに応じることなく、ゼレンスキー政権の東部地域への軍事的攻勢も強まる中で、二月二四日のロシアによるウクライナ侵略戦争が始まった。

最後に、この戦争の意味するものは何か、論点を整理しておこう。第一に、ウクライナ戦争は冷戦後の

米帝一極覇権の衰退、BRICSなど新興資本主義大国の勃興と多極化の世界を可視化した。ロシア非難の国連決議の賛否、経済制裁への参加状況を見ると中国・インド・ブラジルなど新興資本主義大国が欧米と距離を取っていることが分かる。今回の事態を受けて、EUは「五千人規模の即応部隊」の創設に着手したとも伝えられている。NATOの「終わりの始まり」だ。米帝バイデン政権は中国包囲網を軸とする「インド太平洋戦略」を二月一日に公表したばかりだが、それが新たな戦略と言うよりも米帝国主義の衰退のプロセスに過ぎないことが改めて暴露された。

第二に、二二世紀に入ってから危機を先送りすることで延命してきた新自由主義・グローバル資本主義が抱えてきた深刻な矛盾、「軍事ケインズ主義」に依存し、「カンフル剤」としての戦争機械を内包するという構造的矛盾が露わになった。「軍事技術の多くは・・・終わらなき資本蓄積を支え、独占市場を通じて資本主義的権力の集中を昂進させることに大いに貢献した」(D・ハーヴェイ)。冷戦終結後の「平和の配当」を求める国際世論に怯えた軍産複合体が新たに着目した戦争機械の一つが、ワルシャワ条約機構と共に解体されるはずだったNATOの東方拡大。ロシアに対する

第二に、ウクライナ戦争は冷戦後の

欧米日による前例のない経済制裁は、金融システムとサプライチェーンをズタズタに引き裂き、インフレを加速させて自らの頭に降りかかる。コロナ・パンデミックに加えてウクライナ事態の「複合危機」が、ドル基軸の金融システムの終焉、グローバル資本主義の「終わりの始まり」を加速させる。第三に、原発大国ウクライナの戦場化は核の脅威をリアルに浮かび上がらせた。ロシア軍による欧州最大規模の原発の占領は、通常以上に放射能汚染の危険性を増幅させている。加えてプーチンが核兵器使用をチラつかせていることがある。ロシア国内ではクリア併合時の熱狂はなく、支配階級内部の動揺の兆しもあり、プーチンの権威主義独裁体制そのものの不安定化を指摘する声もある。NATOが軍事介入する事態になれば限定的な核の使用が現実化する。

第四に、ウクライナの惨事に便乗して、世論を「国防充実」「改憲」へと誘導し、日米の軍事一体化と戦争国家化をさらに推し進めようとする日帝支配階級の企みを暴露し、粉碎するこ

第四に、ウクライナの惨事に便乗して、世論を「国防充実」「改憲」へと誘導し、日米の軍事一体化と戦争国家化をさらに推し進めようとする日帝支配階級の企みを暴露し、粉碎するこ

自公から共産党まで挙国一致のウクライナ国家支援の雰囲気蔓延する中で、沖縄選出の高良鉄美参議院議員が「決議案で『ウクライナと共にある』という言い回しには違和感がある」と表明してウクライナ支持の参議院決議に反対したこと。「れいわ新選組」が衆参の決議に反対し、三月三日のゼレンスキーの国会オンライン演説後の談話で、「日本の行くべきは、ロシアとウクライナどちらの側にも立たず、あくまで中立の立場から今回の戦争の即時停戦を呼びかけ和平交渉のテーブルを提供することである」としていることは記憶に留めよう。

岸田政権は交戦中のウクライナ政権に防弾チョッキなどの防衛装備品を提供することで参戦国への一歩を踏み出した。「台湾有事」を扇動し、琉球弧の島々を軍事要塞化し、日米同盟の盾にしようとする「日米共同作戦計画」＝沖縄戦場化計画を葬り去る闘いが求められる。とりわけ「核共有」(安倍)や「尖閣諸島への工作物設置」(高市)などと挑発的な言辞を振りまき、「敵基地攻撃能力」を含めた更なる軍事大国化、琉球弧の軍事要塞化を促進せんとする日帝支配階級の野望を粉碎しなければならぬ。安倍の「核の共有」論は、明らかに米帝が狙う琉球弧への中距離巡航ミサイル配備の露払いだ。

沖縄人民の自立解放闘争に連帯し、日米同盟粉碎・日本国家権力解体、東アジア・環太平洋圏人民連帯秩序の構築を！情報金融独占資本主義・全球化帝国主義を打倒しよう！共に闘わん！

共に闘わん！

(早川礼二)

【映画評】

『ザ・ユニオン・ステイツ vs ビリー・ホリデイ』

黒人差別に歌で挑んだ女性シンガー

この映画のキャッチコピーは「この国は彼女を許せないんだ。彼女は強くて、美しく、黒人だから。うん、なんだかわかる。題名は少々大げさに見えるが、内容はアメリカでもっとも著名なジャズシンガーのひとりであるビリー・ホリデイの、ある側面に焦点を絞った伝記映画と言っている。

映画のモデルとなったビリー・ホリデイは、一九一五年にアメリカ合衆国フィラデルフィアに生まれ、一九五九年、ニューヨーク・ハーレムの病院で亡くなっている。四十四歳の若さだった。ビリーは、売春婦であった母親の監護が不十分だったため、親戚や施設を転々とする幼少期を送っている。十一歳のときには近所の男からレイプ被害を受けている。母親とともに売春の罪で逮捕されたこともあるという。歌手として絶大な人気を誇った絶頂期も麻薬やアルコールから抜け出すことができず、凄絶な生涯を送った女性

でもある。代表曲は「奇妙な果実」。この歌こそ映画の題名のもととなっている曲だ。「南部の木には変わった実がある」と歌いだされる「奇妙な果実」。有名な曲だから知っている人も多いと思うが、この「果実」とは、リンチを受け虐殺され、木に吊るされた黒人の死体のことだからだ。作詞作曲したニューヨーク在住のユダヤ人ルイス・アレンは、アメリカ共産党員である一方、フランク・シナトラなどにも楽曲を提供している。彼は新聞でリンチにより吊るされた黒人の写真を見てショックを受けたことからこの曲を作ったという。そしてグリニッジ・ヴィレッジのナイトクラブの専属歌手であったビリー・ホリデイと出会った。その後、彼女は毎晩、ステージの最後の歌として歌うことになる。

さて、映画の話に戻ろう。あらすじはこうだ。

一九四七年、ジャズシンガーの

ビリー・ホリデイ（演ずるのはR & Bシンガーのアンドラ・デイ）は人気の絶頂にあった。当時では珍しく白人と黒人が同席できるニューヨークの著名なクラブで、毎日巨額のステージを繰り広げている中、夫から「奇妙な果実」は歌うなど言われる。ビリーは「私には大切な歌」だと抗議するが夫とマネージャーから押さえつけられる。夫は、連邦麻薬取締局長官から圧力をかけられていた。長官は当時盛んになり始めた公民権運動を煽る「奇妙な果実」を危険視していたのだ。

歌うだけでは逮捕できないため、ビリーを麻薬使用の罪で逮捕しようと計画する。最初の罠はおとり捜査だった。黒人捜査官のジミーは、ビリーの熱烈なファンを装ってステージに通いつめ、楽屋を訪ね親しくなるなどして身辺捜査を進めた。結果、ビリーはジミーによって現行犯逮捕される。執行猶予が付くと予想されていたビリーだったが、裁判で懲役一年と一日の実刑判決を受け収監される。功績でジミーは黒人初の連邦捜査官へと出世する。ジミーには蔓延する麻薬から黒人社会を救いたいという使命感があったが、「あの歌を歌う勇気のある黒人は他にいない」と自分の母親に責められ

る。さらにビリーの親友から、その辛い生い立ちを聞かされる。葬儀屋を営む裕福な家庭に育ったジミーには想像もつかない人生だったが、彼はビリーを知れば知るほどに心を奪われていく。

行いを後悔したジミーは、今度には面会して騙せと命令されるが、「これからは誰も信じるな。出所後に罠を仕掛け、また私に逮捕させる気だ」とビリーに伝える。

一九四八年、出所したビリーはカーネギー・ホールでコンサートを開き、待ちわびた人々に熱狂的に迎えられて大成功を収める。だが、麻薬取締局長官からニューヨークでの労働許可証を無効にされたビリーは、ショービジネス界にコネのあるジョンを頼ってステージを続ける。結果として稼いだ金をすべてジョンに取り上げられ、公私ともにジョンの支配下に置かれることになる。連邦麻薬局の次の手は、そのジョンを使つての罠だった。しかし、ジミーの証言でビリーの容疑は晴れる。ビリーはジョンと手を切り、全米ツアーを始め。長官の指示で、ジミーはツアーを追いかけるが、彼はビリーに完全に恋をしていた。

一九四九年、ビリーは南部で「奇妙な果実」を熱唱し、「KKKに對抗。南部での勇気ある行動」と

称えられる。ビリーの活躍に焦った麻薬局長官は、さらなる罠を仕掛けようとする…。

あらすじは以上だが、ビリー・ホリデイは、実際廉潔な人ではなかったし、本作でも他者に依存する場面が強調されこそすれ、英雄として描かれているわけではない。二十世紀の前・中半を黒人で、女性で、ましてバイセクシュアルとして生きることが楽なわけがない。それでも、差別を告発する歌を歌い続け、男と女を愛し、ステージを心から愛し続けたビリー・ホリデイは、現在でも輝き続けているように思う。登場人物が若干類型的に描かれていることなど、映画作品としての完成度はそれほど高くない。また、演奏のシーンがあまり多くないことに、ジャズファンとしては不満も残るが、テーマは普遍的だ。この駄文を皆さんが目にする頃には、シネコンなどの大きな映画館での上映は終わっていると思うが、四月以降も全国各地のミニシアターでの公開が予定されている。また、ありがたいことにYouTubeで「奇妙な果実」を始めとした彼女の歌声を聴き、姿を見ることができ。興味のある方はどうぞご覧ください。（あんぶれら）